

生活科学研究所主催

家政大学創立 125 周年「レクチャーフォーラム」報告

生活科学研究所所長

村上 和雄

生活科学研究所では、毎年1回、各分野の専門家を招いて講演をしていただくレクチャーフォーラムを緑苑祭の行事として、開催しています。一昨年は、淑徳大学教授（現明治大学教授）北野 大先生、昨年は東京農工大学助教授 高田秀重先生にお話し、環境に関するテーマでお話をいただき、毎年たくさんの聴衆が感銘を受けています。

今年は、東京家政大学創立 125 周年記念事業の一環として、愛媛大学沿岸環境科学研究センター教授 田辺信介先生に講演をお願いしました。先生は、グローバルな化学物質の汚染、特に東アジアの環境汚染について研究され、世界的に高名で、数々の賞を受賞されています。昨年は、北米国際環境毒性化学学会（The 2005 SETAC-Society of Environmental Toxicology and Chemistry）から、環境毒性学および環境化学分野で最も優れた業績を上げた研究者を毎年一人表彰する Founders Award 国際賞をアジアを拠点とする研究者として初めて受賞されました。

講演は「有害物質によるアジアの環境汚染」というテーマで10月28日午後1時より1号館6A講義室で行われました。聴衆は約150名と盛況でした。

内容は、次の通りでした。

アジア太平洋地域を中心に環境ホルモン（POPs）による環境汚染の実態と生物影響を地球的視点で紹介され、POPsの汚染は今後途上国で拡大する可能性があり、その現状と問題点をたくさんのデータをもとに熱く講演されました。

生物にとって厄介なものは、毒性が強く、生体内に容易に進入し、そこに長期間とどまる化学物質である。こうした性質を持つ化学物質の代表に、PCPs やダイオキシンなどがあり、生物蓄積性の POPs として大きな社会的関心を集めている。POPs の環境汚染は地球規模で拡がり、海はこの種の物質の最終的な到達点であり溜まり場となっている。海に棲むアザラシや鯨、アホウドリなど海棲高等動物の汚染が多く見られ、大量へい死など POPs が原因と思われる異常も多数報告されている。これら高等動物への顕著な汚染と影響は、この種の動物の特異な生理・生体機能に原因があると述べられました。

聴衆は、たくさんのデータが示され、化学物質汚染による奇形な動物たちが次々にスクリーンに写し出されると驚きの声が上がっていました。化学物質による環境汚染がグローバルに確実に進んでいることを認識する貴重な講演でした。